

I 音楽科における自律した学習者の姿

- 「音楽のもと」に目を向けながら、自らの音楽表現をよりよいものにしようとする姿。
- 感受と知覚の両方を働かせ、思いをもって音楽と関わり、仲間と表現することで、人とのつながりを大切にする姿

II 授業デザインの取組

- よりよい表現を目指し、表現力の向上につながるように、協働学習の中でモデリングによる学びを取り入れる。
- 根拠をもって互いの音楽表現のよさを認め合うことができるように、「演奏者」「聴き手」になり助言し合える場を設定する。

III 1年次に生成した仮説

1 成果

強弱や音の重なり、反復と変化といった音楽の特徴に着目しながら、自分たちの思いを重ねて表現しようとする姿



中学生のゲストティーチャーの範唱を聴いたり、助言を貰ったりして、自分たちが目指す表現の方向性を自覚し、学習課題に向かえるようにした。

合唱のポイントを掲示したり、中学生という身近なゲストティーチャーの範唱を聴いて助言を貰ったりする中で、児童は「声のひびき」「言葉」「音楽にこめられた思い」など、表現の手がかりを主体的に見付けていった。「将来は先輩たちのようにゲストティーチャーとして小学校に教えに行きたい」「先輩が出来るなら自分ももっと表現できる」と、プロのゲストティーチャーと違った良さが出ていた。自分のパートに不安をもつ児童は、友達やゲストティーチャーの助言を受けながら歌い、音の重なりの中で自分の役割を確かめようとする姿が見られた。また、楽譜の強弱記号や反復の構造に気付き、「ここは盛り上がりをフォルテで伝えたい」「語頭をはっきりさせたい」など、音楽的根拠と自分の思いを関連付けて表現を工夫する姿が増えていった。聴き合う活動では、前時までの到達度を振り返り、自分たちが目指す表現の方向性を自覚し、学習課題に向かえるようにした。強弱や音の重なりを照らして互いのよさや課題を伝え合い、歌詞から見える気持ちの表現につなげることができた。児童は「聴き手に伝える難しさ」や「繰り返しの部分が聴かせどころになる」といった気付きを基に、自分たちの表現を更に高めようと粘り強く取り組んだ。これは、音楽的な視点をもってゲストティーチャーや仲間と関わりながら表現を深めていく姿が実現されたといえる。

太鼓の音色やリズムのつなげ方に着目しながら、自分たちの思いに合った表現を生み出そうとする姿



鑑賞や中間発表で学んだことを生かして、「友達と一緒におまつりの音楽をつくってみたい」という意欲を高め、気付いたことを引き出して学習課題に向かえるように働きかけた。

活動では、「音色」「リズム」「かけ声」「はじまり方」「おわり方」など、音楽を構成する要素を掲示したことで、児童は自分たちの表現の工夫を意識しやすくなった。一定の拍ののってリズムを取ることが難しい児童も、教師と一緒に手拍子や足踏みをする中で拍感をつかみ、友達とリズムをつなげることに挑戦する姿が見られた。また、太鼓の面だけでなく端を使ったり、かけ声を入れたり、速度に変化をつけたりするなど、児童はお祭りらしさを生かしたりリズムづくりに積極的に取り組んだ。中間発表では「演奏者」と「聴き手」に分かれて助言し合い、音楽的根拠をもって表現のよさを認め合う姿が育まれた。聴き合いを通して「皆でつなげるともっとお祭りのようになる」「踊りたくなる感じが出てきた」などの気付きが生まれ、児童は自分たちの音楽をよりよくしようとしていた。

2 課題

一部の児童は、音楽的な気付きと自分の思いを十分に結び付けられず、表現の変容が起きにくかった。合唱ではパートの役割理解が不十分で歌い方に迷う姿が見られ、お祭りの音楽づくりでは拍の安定や工夫の方向性がかみにくい児童がいた。より深い表現につなげるために、基礎的な技能の定着を図る活動を取り入れていきたい。

指導者：奥田 瑞季

研究の実際

1 題材「お祭りの音楽」

2 授業の実際

(1) 様々なお祭りの音楽に出会う

子どもたちは日頃から「お祭り」という言葉に親しみをもち、地域の行事に対して強い関心を示している。本題材では、その興味を学習の出発点として、まず日本各地のお祭りに用いられる音楽に触れる鑑賞を行った。「さんさおどりのたいこ」や「つがるじょっぱりだいこ」を鑑賞した際には、子どもたちは太鼓の響きに自然と惹きつけられ、A児は「たいこはドンドン叩くだけだと思っていたけれど、お祭りによって音が全然違う」と驚いていた。この姿から、子どもたちは単なる音の違いではなく、リズムや音色が生み出す雰囲気の違いに気付き始めていることが伺えた。音楽の文化的背景や地域性に触れながら、音の特徴を比較しようとする姿勢が見られ、鑑賞活動が学びの広がりにつながっていると感じた。鑑賞を踏まえて、自分でリズムをつくって楽しむ活動では、子どもたちが自分の音を聴き取りながら「もっとそろえたい」と言葉にし、リズムの正確さを意識し始める姿が見られた。基礎的な技能の定着が、後の表現活動における工夫や創造性の発揮につながると感じた。手拍子や口唱歌で繰り返し練習し、正確に叩けるようになったマイリズムを、いざ太鼓で演奏してみると、音の響きや腕の使い方が手拍子とは大きく異なることに気付き、子どもたちは驚いた表情を見せた。この姿から、子どもたちが「音を出す身体感覚の違い」に気付き始め、より本格的な表現へと意識が向かっていく様子が伺えた。鑑賞のときに感じるものと、実際に本物の楽器を使って演奏する時に感じるものは大きく違い「こんな音が鳴るかも」と想像して叩いたときの差に驚いたり、どうしたら映像のように叩けるか考えたりと意欲に繋がったのではないかとほっとした。

今回の学習で大切にしたい事は、ひとつの「お祭りの音楽」をどんな風に仕上げたいか考えることである。「マイリズムをグループの友達と繋げて、グループでどんなお祭りの音楽にしたいかワークシートに書いてから取り組みましょう」と声掛けをした。すると、あるグループでは、B児が「リズムの他に歌を入れた方がいい。わたしが歌うね。」と提案した。仲間は「合うかな」と不安を口にしていたが、実際に合わせてみるとお祭りの雰囲気にぴったりと合い、自然と笑顔が生まれ、音楽づくりが一層楽しいものになっていった。また別のグループでは、C児が「だんだん強くしたい」と演奏の変化を提案した。実際に強弱を段階的につけながら叩いてみると、音楽に高まりが生まれ、仲間から「いいね」という声が上がった。これらの活動から、子どもたちが自分たちの工夫が音楽の感じを変えることを実感し、表現の幅を広げていく事が大事だと実感した。

(2) 発表から見えたお祭りの音楽

子どもたちは、鑑賞教材の中で見た「構え方」「ばちを回す動き」「演技をしながら叩く姿」「叩く場所を変える工夫」などに注目しており、「これ、自分たちのお祭りにも使えそう」と考えながら練習に取り入れていた。鑑賞のときにどのような演奏の仕方をしているか、どんな音がするかを子どもに問い、発表して全員で共有したことで、表現の幅を広げる具体的な手掛かりとなっていた。

発表に向けて、各グループでは「どんなお祭りの音楽にしたいか」を話し合いながら練習に取り組んでいた。「リズムを工夫して楽しいお祭りになりたい」「構え方を工夫して明るいお祭りになりたい」など、子どもたちはそれぞれにイメージをもって演奏の順番を決めたり、同じリズムを複数人で叩いて厚みを出したりするなど、表現の工夫を重ねていた。あるグループでは、D児が演奏の途中で「それぞれそれぞれ！」と掛け声を入れた。発表を聴いた子どもからは「お祭りみたい！」という感想が出て、掛け声が音楽の雰囲気を大きく変えることを実感していた。また別のグループでは、最後の音を全員で揃えて力強く叩き、終わりの印象を際立たせていた。E児は「最後、お祭りって感じで終わったね」と振り返り、締め方が音楽全体の印象に影響することに気付いていた。

お祭りの音楽は、ハーモニーや音程を気にせず取り組める一方で、どのような工夫を加えれば聴き手に興味をもってもらえるか考える必要がある。子どもたちは、自分たちなりの解釈を基に、適当ではなく根拠をもって音楽をつくり上げていた。聴き手も思わず体を揺らしたりリズムを刻んだりして、音楽に引き込まれている様子が見られた。形に縛られずにお祭りの音楽をつくり、仲間や観客に「楽しい」と感じてもらった経験は、子どもたちにとって大きな喜びとなった。この成功体験が、後の音楽づくりへの意欲や創造性の発揮につながっていくことを期待したい。

